漁況海況予報事業*

概　要

渡邊勇二郎・竹内淳一・中地良樹・武田保幸
向野幹生・調査船「きのくに」船長　藤井一人他６名

目　　的

本県沿岸および同沖合の海況と本県沿岸漁業の漁況をモニタリングして、海況と漁況に関する調査研究を行う。同時にこれらの情報を漁業関係者に報告して漁業経営の合理化に資することを目的とする。

なお、本事業は水産庁の補助事業であり、本報告は「平成８年度漁況海況予報事業結果報告書」として既報している。

方　　法

平成８年度漁況海況予報事業実施方針（水産庁）にしたがって実施した。

結　　果

漁海況速報（第８－13～第９－12報）ならびに沖合黒潮調査速報（1996.No.３～No.８、1997.No.１～２）で速報した。特徴的な海況と漁況の概要は以下のとおりである。

１　海況

黒潮：図１に示したように、黒潮は典型的な接岸がつづいた。東進速度の速い小蛇行が多く、その通過に伴って一時的に「やや離岸」することもあった。

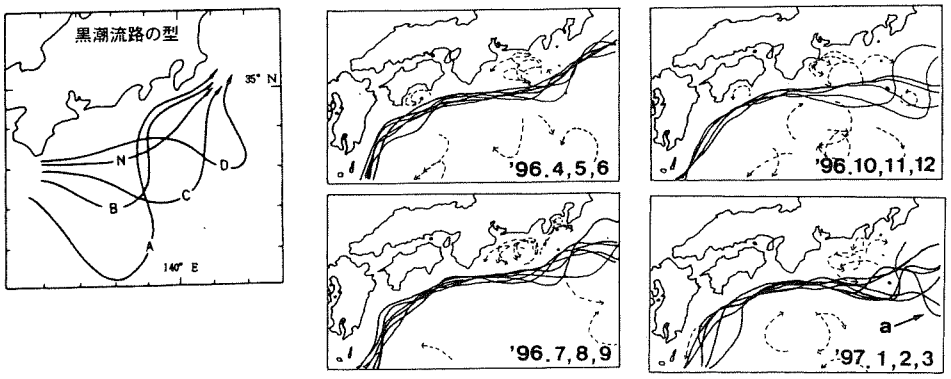

図１　黒潮流路（1996.　４～1997.　３、水路部海洋速報）

1996年１月後半、都井岬南東沖に小蛇行が発生し、３月上旬に潮岬沖を通過した。５月後半に発生した小蛇行は、６月後半には紀伊水道沖そして潮岬を通過した。

また、７月下旬に都井岬沖で発生した小蛇行は、約１週間で室戸岬に達し、８月初めには潮岬を通

*.漁況海況予報事業費による。

過した。つづいて８月前半に種子島東方で発生した小蛇行は、８月後半には都井岬沖、10月前半に足摺岬沖～室戸岬沖、10月後半には潮岬沖に達した。

これらの小蛇行は、いずれも熊野灘～遠州灘で発達せずＢ型流路になることは少なかった。前年1995年と同様に、小蛇行の発生が多く、その東進速度が速いことが特徴的である。図１の図中矢印ａで示した1997年1月下半期には、伊豆列島線付近で黒潮流路が北緯31°N付近まで大きく南へ張り出し、過去に例のない流路がみられた。

潮岬南沖の黒潮は、表１に示したようにほぼ安定して10～20マイル程度の接岸がつづいた。しかし、人工衛星画像などによれば小蛇行が通過する頃に一時的に25～30マイル程度まで「やや離岸」した。

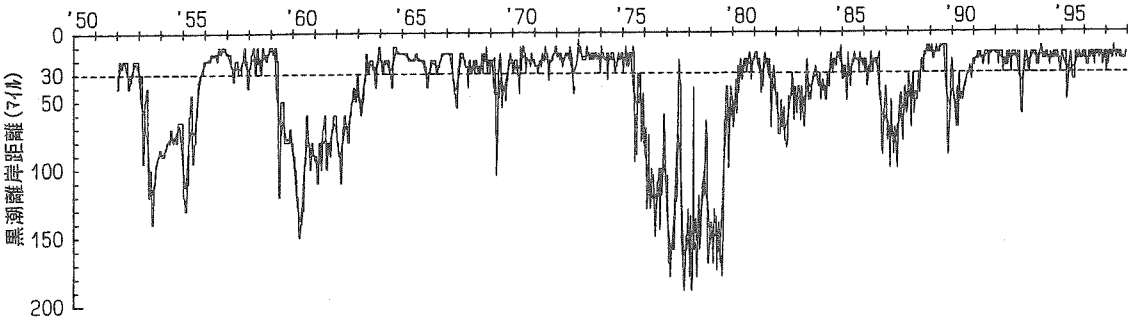

図２　潮岬南沖の黒潮離岸距離（マイル、水路部海洋速報）

表１　潮岬沖合と紀伊水道（合ノ瀬）沖合の黒潮流軸位置（正南距離：マイル）

	月	1996.4	5	6	7	8	9	10	11	12	1997.1	2	3
潮岬	前半	*20 N	*15 N	*15 N	*15 N	*15 N	15, *20 N	*15 N	*25 B	*15 D	*30 N	*25 D	*15, 10-15 C
	後半	*15 15 N	*20 25 N	*25 N	*15 15 N	*15 10 N	*15 N	*15 N	*20 C	*15 25 N	*15 10-15 D	*15 D	*15 10 C
合ノ瀬		40	55	－	45	35	－	－	－	－	－	－	35
三木埼		－	－	－	－	－	－	－	－	40	－	－	－

*印は水路部海洋速報による

図２に示した黒潮の長期変動から、最近年の黒潮接岸は、1991年以降約６年間にわたって続いていることがわかる。この６年間では1993年と1995年に短期間だけ30マイル以遠に離岸しているだけである。

沿岸水温：定線観測における各海域各層水温の平年偏差を図３に示した。紀伊水道で夏季から冬季（７月～12月）にかけて高め、熊野灘では夏季の高めを除き全般に低めで経過した。黒潮の接岸がつづいたことで、全般的に紀伊水道で水温が高く、熊野灘で低かった。新調査船の建造のため、10月の定線観測は欠測であった。

紀伊水道内部（日ノ御埼以北）：表層で全般的に平年並～高めで経過した。とくに高めだったのは７月、８月である。下層でもほぼ同様の傾向であった。

紀伊水道外域（日ノ御埼～切目埼～瀬戸埼～潮岬）：表層で全般的に平年並～高めで経過した。とくに高めだったのは7月、8月、12月、3月である。下層でもほぼ同様の傾向であった。これは12月を除き、紀伊水道内部とほぼ同様の水温変化であった。

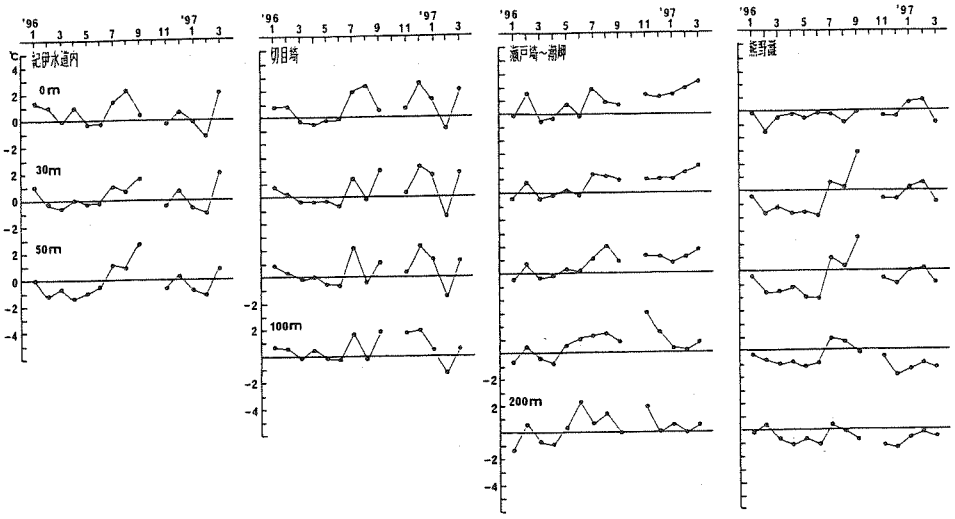

図3　海域別各層水温の平年偏差

熊野灘南部（樫野埼～駒埼）：7月～9月の中層（30～100m）で平年並～高め、それ以外は全般的に低めで経過した。

2　漁況

マイワシ：春～秋季における当歳魚の漁獲は前年・平年を下回った（南部町・串本1そうまき網、4～12月、対前年比12.3%、対平年比16.5%）。

12月中旬以降、潮岬周辺～熊野灘南部に中・大羽群が来遊し、熊野灘定置網（太地、宇久井）を中心に前年を上回った。

マシラスは12月上旬から水道外域の田辺湾～南部湾で漁獲され始め、3月まで持続した。紀伊水道内でも12～1月にややまとまった漁獲があり、全体の来遊量はほぼ前年並みであったと推定される。

カタクチイワシ：紀伊水道内のパッチ網では4～5月にカタクチシラス主体に前年を上回る漁獲があり、この漁は7月まで持続した（箕島町漁協、4～9月、対前年比263%、対平年比105%）。水道外域の田辺湾～南部湾ではマシラスは低調であったが、5月を中心にカタクチシラス主体で前年・平年を上回った（南部町漁協、4～9月、対前年比186%、対平年比106%）。8月以降は全域で低調に推移した。

ウルメイワシ：春～秋季の棒受網による当歳魚漁獲量は、各地とも平年・前年を下回った（串本漁協、4～11月、対前年比44.9%、対平年比47.1%）。南部町漁協1そうまき網では7～9月にゴマサバ主体の漁獲に本種大羽群の混獲がみられたが、量的に少なかった。

サバ類：5月以降の春～夏季はマサバの目立った漁獲はみられなかった。まき網による秋サバ漁は8月中旬に初漁があり、9月まで前年を上回る漁獲があったが、10月には低調になった。2そうまき網による8月の漁獲物はゴマサバが約50%混獲されていたが、9月に入るとマサバ1歳魚主体になり、10月に再びゴマサバ約40%にかわった（2そうまき網、4～9月、対前年比 89%、対平年比101%）。マサバは体長モード31cmの1歳魚が主体であった。1そうまき網ではゴマサバが主体で、串本漁協1そうまき網は6月以降ゴマサバ当歳魚をまとまって漁獲した（串本漁協1そうまき網1統、6～12月、

対前年比185.3%、対平年比70.3%）。

マアジ：2～3月に2そうまき網で前年を上回る漁獲があった。夏～秋季は卓越年級群である1歳魚（1995年級群）主体に2・3歳魚混じりでまとまった漁獲があり、漁獲量は高水準であった（2そうまき網、4～12月、対前年比84.6%、対平年比167.5%）。当歳魚（1996年級群）は前年より少ない模様であるが、熊野灘定置網での漁獲が目立った。

カツオ：ひき縄カツオ漁は初漁期1月～3月に好漁した。しかし、最盛期終盤の5月は過去16年間で最低の漁獲であった。カツオの体長は50cm級中型魚が主体で、例年の小型40cm級は主群とならなかった。沿岸域にカツオ好漁場が形成されることが少なく、小型船は低調であった。これに対し、沖泊り操業の約5トン以上の大型船は好調であった。漁船性能による好不漁の格差が大きかった。

3　沖合・沿岸・浅海定線調査報告、海況・漁況情報の発行

1）沖合・沿岸・浅海定線調査報告

主な配布先　水産庁、水産研究所（南西，中央他）、都道府県水産試験場、気象庁、漁業情報サービスセンター、水路部

発行部数　　沖合定線報告　45部

沿岸・浅海定線報告　55部

南西海区水産研究所外海調査研究部に所定の海洋観測入力様式「ＰＯＤ」にてデータを入力したフロッピーディスクで報告した。

2）海況・漁況情報の発行

a）海況速報：漁業情報サービスセンターからファックス受信した海況速報は、県下関係漁協に直ちにファックス送信を行った。

b）人工衛星利用沿岸海況図：漁業情報サービスセンターからファックスで提供される画像のうち、利用価値のあるものは県下関係漁協などへファックス送信した。

c）南西東海海域海況速報：上記　a)、b)と同じくファックス送信を行った。

d）南西東海海域沿岸漁況情報：適宜業種別広域漁況を関係漁協にファックス送信（2～7月）した。

e）沖合黒潮調査速報：調査船「きのくに」による本県沖合の黒潮とその内側域の漁場海況調査を行った結果について、速報で関係漁協、関係機関にファックス送信を行った。その発行先は65件、回数は10回であった。

主な提供先：水産研究所（南西）、府県水産試験場、県内全漁協、関係協力漁業者、その他関係者。

f）漁海況速報：和歌山県沿岸を中心とする1週間の海況と漁況情報をファックスで提供した（漁海況速報第8－13号～第9－12号）。

主な提供先：水産研究所（南西）、府県水産試験場、県内全漁協、関係協力漁業者、その他関係者。

g）その他

・毎週1回海況、漁況の新聞広報（週間南紀ウィークリー、紀伊民報等）を行った。

・定地水温は毎日、気象協会を通じて広報（和歌山放送）した。

・串本東西岸の養殖漁場に設置しているテレメータブイの水温を毎日、養殖関係者にファックス送信した。

・毎週１回海況と定地水温について電話で情報提供し、その情報を骨子とした海況と釣情報が毎日新聞に掲載されている。

4　漁況などの特徴的な現象

1996年の漁況の特徴として、次のことがあげられる。

1）熊野灘のサンマ漁期が大幅に遅れ、1996年１月下旬に初漁、漁も低調であった。

2）1996年冬～春季、紀伊水道外域の田辺湾～南部湾のパッチ網でマシラスが低調であった。1993～1995年には漁獲の回復傾向がみられていたが、1996年は補給がかなり少なかったようである。

3）1996年４～５月、紀伊水道内のパッチ網でカタクチシラスが５年ぶりの好漁となり、品質も良く高値が続いた。６月も若干の漁が持続した。

4）1996年冬季以降、紀伊水道外域の中型まき網でゴマサバは若干漁獲されているもののマサバの漁獲が極めて少なかった。

5）1996.４／14、串本町大島の定置網でブリとワラサ（メジロ）の計約2,300尾を大漁した。

7）1996.５／５に始まったモジャコ採捕はきわめて低調で経過した。

8）1996年５月中旬～下旬、熊野灘の宇久井定置網にミズクラゲの大量入網があった。同時期、ギマが目立って多かった。同時期、紀伊半島西岸の椿定置網でもギマの入網がみられた。

9）1996年５月中旬～６月、潮岬周辺沖合で「流れ物」が多く、沿岸かつお一本釣り（７～19ｔ型）の操業が目立った。６月下旬には大王埼付近にもカツオの漁場が形成された。

10）1996.９／26－27と10／９－10ころ熊野灘～潮岬沿岸で間欠的にカツオの好漁があった。その体長は30cm級の小型カツオで、秋季にこのような小型魚が漁獲されたのは珍しい。

11）近海まぐろはえ縄によるクロマグロ成魚の勝浦港への年計水揚尾数（主漁期１月～６月計）は、1996年に再びやや増加した（'90年：638尾、'91年：602尾、'92年：1,725尾、'93年：1,435尾、'94年：3,340尾、'95年：2,021尾、'96年：3,210尾）。

12）1996年秋季、串本でクロマグロ幼魚（シビ仔）の中にコシナガが混じって水揚げされていた。その尾叉長は24～32cm、水揚時に確認できた尾数はコシナガ51尾、シビ仔55尾であった。漁場は熊野灘～潮岬沿岸であった。これまで、コシナガは太平洋沿岸では高知県まで混獲が確認されていた。

13）1996年８～９月、潮岬沿岸でトビウオ刺網が好漁であった。ハマトビウオも多いようである。調査船で、９月にトビウオ幼魚が多いことが目視観察された。

14）1996年７月～８月、大阪府堺市の病原性大腸菌Ｏ－157は海産物流通市場に影響し、和歌山県にも大きな影響があった。

15）1996年12月から翌年１月にかけて、紀伊水道沖の波浪ブイ周辺を中心としてひき縄でヨコワ（２～３kg級）の漁があった。高知水産試験場が夏季に放流した標識魚の再捕が多かった。潮岬周辺では12月下旬に32～35cmのシビ仔が漁獲された。例年夏季を中心にあらわれる小型魚であり初冬の漁獲は珍しい。